

大雨の前日

伊藤左千夫

青空文庫

此頃このころ

は実に不快な天候が続く。重苦しく蒸熱くいやに湿り気

をおんだ、強い南風だ。そうして又、またにわか俄の出来事に無数の悪魔が

駈出して来た様な、にくにくしい土色した雲が、空低く散らかり

飛び駈けつて、引切りひっきなしに北の方へ走り行く。時々空が暗くな

つて雲が濃くなると一頻りひとしきずつ必ず雨を降らせる。

こんな天氣が今日で三日目だ。意地悪く息の長い風だ。人間は

嘆息する、呼吸が為ために息苦しいこと夥おびただしい。此夜明けには止むだ

ろう、此日このの入りには止むだろうも皆空だのみであつた。予よは今

朝になつて、著しく神経の疲労を覚えた。深刻に出水の苦痛を恐

れて居る予は、八月つぎという月の此天候このに恐怖を感じずには居られ

なかったのである。

早く新聞を手にした児供達こどもはいずれも天気予報を気にして見たらしく、十四と十二と七つとの三人が揃そろつて新聞を持って来た。三人は予の左右に屈かがみ加減に両手を突いて等しく父の前に顔を出すのであった。予も新聞を取るや否、自然に氣象台員の談話という項目に眼は走った。直ただちに眼に入るのは、低気圧、颶風等ぐふうの文字である。予は寧むしろこれを読むのが厭いとわしかった。児供等まは父がそれを読んで、何とか云うのを待つものらしく三人共未だ何とも云わずに居る。予は殊ことに児供等の前で其氣象台員の談話を読むのが何となく苦痛でならない。それで予は眼を転じて別項を読み始めた。十四の児はもどかしくなつてか、

「お父さん『あらし』になるの……」

いうと等しく、

「あらしになりやしないねいお父さん」

と、十二のが口出した。

「お父さん水が出るかい……」

こういうのは七つの児であつた。

「大丈夫ねえお父さん」

十二のが二人の詞を打消す様ことばにそういつた。

「うん大丈夫だよ、新聞にあることは当てになりやしないよ」
父はこう云わない訳に行かなかつた。

「ほんとに大丈夫お父さん……」

十四のは不安そうに父の顔を見上げる。

「うん雨は少し降るだろうけれどね大風は吹きやしないだろうよ。そつだから大丈夫だよ」

「新聞にそう書いてあるの……」

「うん」

「そらえいこつた」

七つのはさすがに安心してこう叫んだ。

「わたい大水が出れば大島へ逃げていくだ……」

初めから大丈夫だねい大丈夫だねと云つてた、十二のが、矢張やはり安心して切れないと見え、そう云うのであつた。予はしよことなしに、新聞の記事をよい加減に読み聞かして、これだからそんな

に心配しなくともえい、と^{すか}嫌した。併し^{しか}予の不安は児供等を安心させるのに寧ろ苦痛を感じるのである。

「水が出るにしたって、直ぐではないねいお父さん」

十四のは、どうしても安心し切れないで、そういうのであつた。予は少しく叱る様に押えつけて、

「今夜にも此風さえ止めば大丈夫だから、そんなに心配することはないよ」

予はこう云つて、児供等には次へ出て遊べと命じた。児供に安心させようとする^{ばか}許りではない、自分も内心には、気象台の報告とて必ずしも信ずるに足らない、よし大雨が一日一夜^{ひとよ}降つたにせよ、逃出さねばならぬ様な事は有^あるまいと、強いて自分の不安を

なだめる、自然的心理の働きが動いたのである。乍^{しかしながら}併^ひ自分が心から安心の出来ないのにどうして児供等を安心させることが出来よう。次へ起^たつた三児の後^{うしろかげ}影^{かげ}は如何^{いか}にも寂しかった。予は坐して居られない程胸に苦痛を覚えた。予は起つて庭から空模様を眺めた。風は昨日に増すとも静まる様子は更^{さら}に無い。土色雲の悪魔^{ますます}は益数を加えて飛び駈^{かけ}つて居る。どう見ても一荒れ荒れねば天気は直りそうもなく思われる。予は又^{またその}其空模様を永く見て居るに堪えないで家に入った。妻も入つて来た。三人の児の姉等二人も入つて来た。又々互に不安心な事を云い合つて、我^われと我^わが不安の思いを増す様な話を暫^{しばら}く喃^{なん}々した。果ては予はどういう事があるかと仕方がない、益^{えき}の無いくよくよ話はよせと一喝^{かつ}した。

風の音許り外に騒々しくて、家の内には元氣よく騒ぐものもない。

平生は鉄工所でどんがする鎚の音、紡績会社の器械のうなり、汽笛の響、有らゆる諸工場の雑多な物鳴り等、大都会の騒々しさも、今日は一切に耳に入らない。只ごうつと吹く風の音、ばらばらつと板屋を打つ雨の音に許り神経は昂進るのである。新聞も読掛けてよした。雑誌も読掛けた儘投げてやった。

予はつくづく、こんな土地に住まねばならぬ我が運命を悲しまない訳にゆかなかった。同時に我れながらさもない卑屈な感想の湧き起るのを禁じ得なかった。

平生財を作るにも最も拙な癖に、財力の威徳を尊敬することを

知らなかつた報いだ。貧はこれほど苦しくないにせよ、災害から受くる損傷は苦痛でなければならぬ。現に苦しみつつある我が愚^{おろか}を憐^{あわれ}まない訳に行かない。我^{われ}に千四五百円の余財があらば、こんな所に一日も居やしないが、千四五百の金は予の今日では望外の事である。予は財なきが故に、時々云うに云われない苦悶をせねばならぬ、厭^{いと}うべき此土地^{この}に囚^{とら}れて居ねばならないのである。

今少し貨殖の道に心掛ければよかつた。思えば自分はどうか考え^{うぐ}ても迂愚であつた。

予はこんな風に、今更考えても何の役にも立たない愚^{おろか}な事を考えずに居られなかつた。

つまらない。実につまらない。何だ馬鹿馬鹿しい。実にくだら

ないなア。

俄にわかに気づいてうんと自分を嘲あざけり叱しつて見ても、不安は依然とし

て不安で、今の苦悶の中から、心を不安境外へ抜け出ることとはどうしても出来ない。

今いま茲ここへ来て何を考えたつて役には立たない。未だ雨も降らな

いののに、出水を心配するなどは猶なおさら更無駄な話だ。こう思いつつ

何も考えない事にして、仰あおむけ向に踏んぞりかえった。そうして両

足を伸し腹部も十分に張つて見たけれど、心のくもつて居る様な

胸の苦みは少しも減じなかつた。予よはほとほと自分の体と自分の

心との取扱きゆうに窮しまして終しまつた。そういう内に、何と云つても児供は

児供でどんな面白い事があつたか、苦の無い笑声を立てて騒さわぎ出

した。予も亦不思議と其声に揺られて、心の凝りが聊か柔かになった。

大雨は其^{その}夕^{ゆう}から降出した。雨の音はさながら悪魔の叫喚だ。目に見た悪魔が今は我家の周囲に肉迫^{きつ}し来^きつて、耳に近く其^{その}の叫喚の声を聞く心持がした。

青空文庫情報

底本：「日本掌編小説秀作選 上 雪・月篇」 光文社文庫、光文社

1987（昭和62）年12月20日初版1刷発行

初出：「ホト、ギス 第十四卷第一號」

1910（明治43）年10月1日

※表題は底本では、「大雨《たいう》の前日」となっています。

入力：高瀬竜一

校正：noriko saito

2016年7月9日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

大雨の前日

伊藤左千夫

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>